

歴史探究者としてのパウンド

—「マラテスタ詩章」—

高岸冬詩

エズラ・パウンドは、『詩章』(The Cantos)が歴史を含んだ叙事詩であると述べ、常に歴史を念頭において『詩章』を執筆していた。そして彼の歴史意識は、エリオットの言う有名な共時的歴史意識、つまり、

the historical sense involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence; the historical sense compels a man to write not merely with his own generation in his bones, but with a feeling that the whole of the literature of Europe from Homer and within it the whole of the literature of his country has a simultaneous existence and composes a simultaneous order.¹¹⁾

とほぼ等しかったと言えよう。彼はエリオットよりはやく「すべての時代は同時代だ」と述べ、¹²⁾『詩章』においては、異なる時代の共通の要素ないし対照的要素を並置して、その説を実践している。パウンドがエリオットとやや異なるのは、歴史そのものから詩のモチーフとして具体的事実や人物を頻繁に取り入れていることである。例えば、初期の詩集『ベルソナ』の頃から、自らのマスクとして歴史上の人物、殊にトルバドゥール詩人などを用いてきた。『詩章』ではそうした歴史の具体的活用が一層広範になり徹底してくるのである。

『詩章』冒頭の第1篇を見ると、全篇の主ベルソナとなるオデュッセウスが登場する。彼は冥界に下って死者たちの霊を呼び出すが、これは『詩章』全体が言わば過去の死者たちを蘇らせる目的で書かれることを象徴的に物語る。同時に、“Lie Quiet Divus.”云々という、パウンド自身のものらしき声を二行挿入することで、この『オデュッセイア』の引用が原典のラテン語訳からの英語訳であることを示唆する。これ

はテキストが時代を経て再生するという、『詩章』のもう一つのテーマを先取りするものである。さらに、言うまでもなく、故郷に向けて航海するオデュッセウスは、規範とする知識を求めて歴史の海に漂うパウンドのベルソナとなる。そしてパウンド自身は、ベルソナの背後に身を潜めるのだ。こうした『詩章』全体を集約する巧みな手法でオデュッセウスを登場させてから、神話上の存在も含めて、様々な時代、様々な地域の人物が登場することになる。主なところを挙げると、トルバドゥール詩人たち、マラテスタ、ジェファーン、アダムス、孔子などだ。これらはいずれもパウンドにとって重要な人物ばかりであり、彼は彼らを『詩章』の中で人々に知らしめる必要を感じたのである。

ではパウンドは、こうした歴史詩章をどのようにして書いたのか。それについて、『詩章』で初めて長ページにわたり一人の歴史人物を扱った「マラテスタ詩章」を中心に論じていこうと言うのが、本論の目的である。

I

「マラテスタ詩章」に入る前に、パウンドの歴史の扱い方について、いくつか押さえておきたい点がある。まず、オデュッセウスの航海との類推で用いられている‘periplum’ (沿岸航海) という言葉がある。

periplum, not as land looks on a map
but as sea bord seen by men sailing.
[59/324]

ヒュー・ケナーはこの言葉について、こう説明する。

The periplum, the voyage of discovery among facts, whose tool is the ideogram, is every-

where contrasted with the conventions and artificialities of the bird's-eye view afforded by the map. Forms grow out of data. They are not to be imposed upon data.⁽¹⁾

「沿岸航海」という比喩は、つまり、事実を鳥瞰的な視点から眺めるのではなく、一つ一つの事実を近距離から綿密に調べあげ、その結果導かれた関係のもとにそれらを並べてみせるという手法をさす。この手法は、パウンドがフェノロサから学びとった 'ideogrammic method' (表意文字的方法) や、科学的方法 (生物学者が顕微鏡のスライドを一枚一枚観察するような) の別名といってよい。⁽⁴⁾

パウンドが歴史を扱う場合にとるのは、まさしくこうした方法だ。彼は様々な歴史的データに直接あたり、断片的な事実を集積する。それらを並べ、照らし合わせつつ、過去の対象にできるだけ接近する。そして、過去の人物を、詩の中で生き生きと蘇らせるのである。彼は数多くの資料にあたる。例えば、「マラテスタ詩章」を書く際には、19世紀に書かれたフランス人歴史家によるマラテスタの伝記から、彼に関する一次的資料、情報を集め、それを求めてイタリアまで足を運び、資料館で必要な材料を収集している。パウンドは、そのプロセスの跡をテキスト中に書き込んでいる。

Florence, Archivio Storico, 4th Series
t.iii,e
"La Guerra dei Senesi col conte di
Pitigliano."

[10/42]

このように、歴史の探究者としてパウンドは、様々な事実を「沿岸航海」しつつ、『詩章』を書いていく。これを別の言葉で表すとすれば、更に遡ることになるが、彼が1912年に自らのエッセーの中で提唱した、'luminous detail' の手法ということになる。

Obviously we must know accurately a great number of minute facts about any subject if we are really to know it...
when in Burckhardt we come upon a passage:
'in this year the Venetians refused to make war upon the Milanese because they held that

any war between buyer and seller must prove profitable to neither,' we come upon a portent, the old order changes, one conception of war and of the State begins to decline. . .
. In the history of the development of civilisation or of literature, we come upon such interpreting detail. A few dozen facts of this nature give us intelligence of a period. . .

The artist seeks out the luminous detail and presents it. He does not comment.⁽⁵⁾

つまり、パウンドが歴史の中に求めるのは、詳細なる事実であり、我々にある時代の知識を与えてくれるような細部なのである。彼はそうした数々の細部—「光り輝く細部」を、『詩章』において、comment を加えずに呈示 (present) する。上の引用で彼が挙げているブルクハルトからの例は、ルネサンス期イタリアの変化を物語る細部であるが、『詩章』の中から同じ時代を扱ったパウンド自身の、より詩的、イマジスト的な細部を挙げておこう。

John Borgia is bathed at last. (Clock-tick
pierces the vision)
Tiber, dark with the cloak, wet cat gleaming
in patches.

[5/18]

Tiber catching the nap, the moonlit velvet,
A wet cat gleaming in patches.

[5/20]

この二つの引用は、退廃的な後期ルネサンス時代の兄弟殺しを扱った第5篇からのものだ。これらは、ジョン・ボルジアの体がティベリ川に投げこまれた後に、彼の外套が川面に浮かんでくるイメージを呈示している。パウンドは、水に濡れた外套の表面を、例えば 'nap' (柔らかい布の表面)、'moonlit velvet' など、提喩的に細部を拡げて呈示する。さらに隠喩的に、水に濡れ月明かりを受けて斑らに光る猫の不吉なイメージを並置する。外套が猫に変容し、一方、輝く物体と暗い川がくっきりと対比される。この浮かび上がる外套の、文字通り「光り輝く細部」は、かの有名な「地下鉄の駅で」に似た、闇と光の対照を浮彫り

II

にしつつ、いかなる説明にもまさり、血醒い殺人の、そして血醒い時代の不気味さを物語るように思う。

このようにパウンドは、歴史に解釈を与える出来事の様々細部に着目し、それらを『詩章』の中で巧みに繋ぎあわせつつ呈示していくわけである。そして彼独自の価値基準によって、歴史の細部は分類される。

The poem should establish an hierarchy of values, not simply: past is good, present is bad, which I certainly do not believe and never have believed.

If the reader wants three categories he can find them rather better in: permanent, recurrent and merely haphazard or casual.⁽⁶⁾

パウンドは歴史の価値を、永続する要素、繰り返す要素、一回限りの要素という三種類に分けて考える。例えば神話的な変身の瞬間、ヴィーナス顕現の瞬間などの特権的瞬間は、永続する要素に入るのだろう。それとは別に歴史上の繰り返しをししばし取り上げているのは、『詩章』の特色である。また、歴史における年代順ということは、パウンドの眼中にない。冒頭で述べたような歴史意識の持ち主にとって、過去のある時代は年代を飛び越えて別の時代の隣にあり、一気に現代の隣に呼び寄せられるもする。

We do Not know the past in chronological sequence. It may be convenient to lay it out anesthetized on the table with dates pasted on here and there, but what we know we know by ripples and spirals eddying out from us and from our own time.⁽⁷⁾

パウンドは歴史を、渦を巻いてゆく時間の波として捉えるのだ。しかも、過去を現在から切り離すのではなく、彼自身の位置を意識しつつ、我々の時代という視座から歴史の波を眺める。すると歴史上の人物は、彼自身のペルソナとして機能し、彼の属する現代に過去を引き寄せ、類似や対比の相のもとで過去を扱うことになる。こうしてパウンドは、年代順にかかわらず過去の様々な細部を、彼独自の価値基準に従ってたぐりよせ、結びつけ、渦巻く 'vortex' としての歴史詩篇に蘇らせるのである。

以上で述べたような手法で、パウンドは『詩章』の歴史パートを書いていった。「マラテスタ詩章」も同様であり、前述のように、扱う時代、人物に関するデータを集め、断片化し、翻訳を施して結びつける。パウンド自身は言わば編集者としてテキストの背後に身を潜めて、マラテスタとその時代を呈示することに専念してはいるのだが、現代に生きるパウンド自身の姿がこのペルソナに反映されていることも事実なのである。ではそのあたりを踏まえつつ、「マラテスタ詩章」をより詳しく見ていくことにする。

主人公のシグスマンド・マラテスタは、15世紀のイタリアに生きた傭兵隊長である。通説では、彼は種々の犯罪を犯した悪党とされており、歴史家たちからはあまり省みられることのないマイナーな人物であるようだ。だがパウンドは、彼に目をつけた。そして数多くの資料を調べた結果、マラテスタの汚名は、当時彼を敵視し迫害した教皇ピウス2世の回想録に記録された起訴状から発していること、そしてその起訴状が数々の偏見に満ちた偽証を含んでいることを知ったのである。そこでこの連作においてパウンドは、マラテスタの悪評を払拭し、むしろ死ぬまで迫害に抗して戦った悲劇的ヒーローという実像を、取り戻そうと意図したのである。

「マラテスタ詩章」は、読者を当惑させる以下のような書きだしで始まる。

These fragments you have shelved (shored).
"Slut!" "Bitch!" Truth and Calliope
Slanging each other sous les lauriers:

[8/28]

1行目は『荒地』のエコーなので、この you はエリオットに向けて発せられたものと考えられる。⁽⁸⁾だが、3行をまとめて考えたとき、この1行目はパウンド自身が集めた断片に対する意識を、間接的に表明しているようにもとれる。つまりパウンドは、彼自身が集め、支えた、マラテスタに関する断片的データを、真実の女神と叙事詩の女神 (虚構を含む側) のどちらに捧げるかを決めかねていて、それを両女神ののしり合いという滑稽な詩行に昇華させたのではないか。我々は、「マラテスタ詩章」がはっきりどちらの女神のものであるか、決めることは出来ない。パウンドは、初期の

詩「ペリゴール近く」で、“End fact. Try fiction.”と書いた。¹¹⁾だが、「詩章」で歴史的資料を扱うパウンドに関するかぎり、彼がカロベの側に一方的に肩入れしているということではできない。思うに、「マラテスタ詩章」において、パウンドは、断片的事実の組み合わせから虚構を作りだしつつ、それを、真実であると信じたい彼独自のマラテスタ像として呈示しているのではないだろうか。だが、この時点では少なくとも、虚構性を孕んでいることに、彼自身気づいていたのだろう。それが冒頭に喜劇的な口論をおくだけのゆとりを持たせているのである。彼の作り上げたマラテスタ像が全くの真実だと盲信する段階に至ったとき、彼はファシズムへの危険な一歩を踏み出してしまったように思えるのだ。とにかくこの連作は、パウンドが作りだした叙事詩、そしてパウンドにとっての真実という、両面を孕んだものとして扱う必要があるだろう。

では、パウンドが呈示するマラテスタはどのような人物だったのか。まずマラテスタの本質的性質をあらわす形容語句として、‘*polumetis*’が使われている。“he was being a bit too *polumetis*.”¹²⁾これは、「多才な」とか「知謀にとんだ」という意味のギリシャ語で、オデュッセウスのための形容語句であり、パウンドが肩入れするヒーローたちに共通の属性を表す言葉だ。マラテスタは傭兵隊長として戦いにたけ（彼は新兵器の発明家としても知られていた）、また恋する男として、イソックという女性に熱烈な愛を捧げた。戦いに身を拘束される一方で、芸術に大きな関心を持ち、芸術家たちのパトロンになったり、パウンドが芸術的に高く評価する寺院（Tempio）を建てたりした。パウンドは他のところで、マラテスタを‘*an entire man*’と呼んでいる。¹³⁾そしてこのように多才（多彩）な生き方をしたマラテスタの真の像に近づき、できるだけ生き生きと再現するために、パウンドは一次的資料にあたって、様々な細部を掘り出すのだ。例えば、マラテスタが自ら書いた手紙（第8篇）、マラテスタが受け取り、郵便袋に保管しておいた手紙類（第9篇）、彼の戦友ブローリオが残した覚え書きなどである。パウンドはこれらを巧みに翻訳し、断片化して繋ぎ合わせ、種々の言語（英語、アメリカ口語、イタリア語など）が混じり合った形で呈示する。こうしてマラテスタの姿は、様々な記録を通して現代に呼び起こされ、コラージュのように様々な角度から多角的に捉えられた、モザイク状の像となって浮かび

上がるのである。

マラテスタの人物像に加え、当時の時代状況における彼の立場もパウンドは示している。次の箇所がその好個の例だ。

With the church against him,
With the Medici bank for itself,
With wattle Sforza against him
Sforza Francesco, wattle-nose,
Who married him (Sigismundo) his (Francesco's)
Daughter in September,
Who stole Pèsarò in October (as Broglio says
“*Bestialmente*”)
Who stood with the Venetians in November,
With the Milanese in December,
Sold Milan in November, sold Milan in December
or something of that sort,
Commanded the Milanese in the spring,
the Venetians at midsummer,
The Milanese in the autumn,
And was Naples' ally in October,
He, Sigismundo, templum oedificavit
[8/32]

このパッセージは、最後の一行を除いて、マラテスタに当時いかなる敵対者がいたかということ、そして、彼の最大のライバルであったフランチェスコ・スフォルツァがいかにもまぐるしく同盟関係を変えていったか、ということ、月名と季節名を誇張的に用いることによって示している。言わば、マラテスタが直面しなければならなかった敵と、彼が生きのびなければならなかった混乱した時代とが、強調されているのだ。しかしそうした困難な状況にあるにもかかわらず、「彼は寺院を建てた」というラテン語混じりの確固たる一行が最後に来る。この連作の次に来る第13篇で、パウンドは孔子の秩序に関する教訓“*It is hard to stand firm in the middle*”を引用しているが、¹⁴⁾まさに「真ん中に立つのが困難」な時代に、マラテスタはあえて寺院建立に身を捧げ、「しっかりと立とう」としたのである。マラテスタは、時代の反対勢力に抗じ、時代の渦巻きに巻き込まれつつも、中心を維持して立とうとする男として呈示されている。それは、パウンドが後に翻訳することになる、孔子の『中庸』（*The Unwobbling Pivot*）で言及された「中心を見出して、

ゆるぐことのない」‘*master man*’に似ている。¹⁵⁾さらに、エッセーの中でもマラテスタにふれている箇所がいくつかある。

All that a single man could, Malatesta managed
against the current of power.¹⁶⁾

If you consider the Malatesta and Sigismundo in particular, a failure, he was at all events a failure worth all the successes of his age. He had in Rimini, Pisanello, Pier della Francesca. Rimini still has “the best Bellini in Italy.” If the Tempio is a jumble and junk shop, it nevertheless registers a concept. There is no other single man's effort equally registered.¹⁷⁾

このようにパウンドはマラテスタを擁護するのだが、彼がこの人物の努力を失敗と見なしながらも評価しているところが興味深い。彼にとってマラテスタは、たとえ失敗に終わろうとも‘*current of power*’に抗して一人で戦ったという点が、大いに評価できるのである。そして我々は、マラテスタに似たパウンドの闘争を知っている。彼もまた、『詩章』という詩的モニュメントを、たとえそれが「がらくたの店」と見なされようとも、打ち建てようと努めたのであり、偏見に満ちてはいるものの、*usurer*たちの支配する墮落した時代に、一人の芸術家としてしっかりと立ち、闘おうとしたのだから。

だがこれは少し先走り過ぎたようだ。パウンドがマラテスタを擁護する具体例を、『詩章』の中から上げよう。彼は第9篇で再び、スフォルツァがどのようにベサロをせしめたかを、さらに詳しく述べている。

“that Messire Alessandro Sforza
is become lord of Pesaro
through the wangle of the Illus. Sgr. Mr.
Federico d'orbino
Who worked the wangle with Galeaz
through the wiggling of Messer Francesco,
Who waggled it so that Galeaz should sell
Pesaro to Alex and Fossenbrone to Feddy;
and he hadn't the right to sell.
And this he did *bestialmente*; that is Sforza

did *bestialmente*
as he had promised him, Sigismundo, per
capitoli
to see that he, Malatesta, should have
Pesaro”
[9/34, 35]

ここは、スフォルツァが *bestially* にふるまったと主張するブローリオの言葉を借りて、いかに彼がマラテスタとの約束を破り、フェデリコ・ウルビーノと共に謀してマラテスタの弟ガレアツォからベサロを巻き上げたのかを示している。傭兵隊長スフォルツァは、ブルクハルトのような歴史家からは賞賛されているが、パウンドはここでブローリオの言を通して彼の獸的ふるまいに言及し、マラテスタを擁護するのだ。それに加え、パウンドは後にウルビーノのことを「マラテスタにとってのエイミー・ロウエルだった」と述べ、パウンド自身とマラテスタの置かれた状況の類似をほめかしている。¹⁸⁾

第9篇では、郵便袋から出てきた手紙の引用の中に、マラテスタが6才の息子とその家庭教師から受け取った手紙を全文引用し、冷酷であると見なされていた彼が、家族から意外に慕われていた事実を蘇らせ、彼の暖かい一面を提供する。第10篇では、宗教裁判におけるマラテスタの起訴が、いかに馬鹿げたものであったかをアイロニカルに暗示する。

So that in the end that pot-scraping little
runt Andreas Benzi, da Siena
Got up to spout out the bunkum
That that monstrous swollen, swelling s.o.b.
Papa pio Secundo
Æneas Silvius Piccolomini
da Siena
Had told him to spout, in their best
bear's-greased latinity.
[10/44]

このように、ピウス2世が検察官ベンツィにさせた起訴状読み上げを皮肉たっぷりに揶揄する。教皇を‘*s.o.b.*’呼ばわりするあたりは、辛辣きわまりない。また、

The lump lot given over

To that kid-slapping fanatic il cardinale di
 San Pietro in Vincoli
 To find him guilty, of the lump lot
 As he duly did, calling rumour, and Messire
 Federico d'Urbino
 And other equally unimpeachable witnesses.
 [10/45]

マラテスタの罪状の証拠がすべて、噂及び偏見に満ちた証人からのものにすぎないことをほのめかす。さらにパウンドは、教会の聖水盤の水をインキと入れ替えた、マラテスタの幼い頃の他愛ない悪戯を、教皇側が大真面目で起訴文の中に取り入れていることを示し([10/44])、ユーモアのセンスの欠如した教皇の頑なさを浮き上がらせている。こうした細かな事実すべてが、ピウス2世を中心としたキリスト教側の厳格で融通性のない様と、「異教の作品に満ちた」寺院を建てたマラテスタ側を対比させ、「¹⁷⁾パウンド自身の宗教的好み(異教好き)を反映させているのである。

こうしてパウンドは、マラテスタを迫害する側の価値を引き下げ、逆にマラテスタの価値を上げていくのだが、同時に、迫害にあううちに彼がやがて滅んでいくプロセスを描いていく。「マラテスタ詩章」には、彼が戦勝を収める場面よりもむしろ、彼が敵に追われてやっと逃げのびるという場面の記述のほうが多い。例えば、

Down here in the marsh they trapped him
 in one year,
 And he stood in the water up to his neck
 to keep the hounds off him,
 And he floundered about in the marsh . . .
 And he fought in Fano, in a street fight,
 and that was nearly the end of him ;
 [9/34]

このように彼は、窮地に追い込まれながら、辛うじて逃げおおせるという苦戦を何度となく繰り返す。もうこれまでという危機も幾度かくぐりぬけてきた。だが迫害は次第にきつくなり、彼の運も傾いていく。途方にくれて「しっかりと立つ」のも難しくなっていく。

And one day he was sitting in the chieixa,
 On a bit of cornice, a bit of stone grooved

for a cornice,
 Too narrow to fit his big beam,
 hunched up and noting what was done wrong,
 And an old woman came in and giggled to see
 him sitting there in the dark
 [11/49.50]

彼の滅びを暗示するフレーズ“the poor devils dying of cold”([9/37],[10/42],[11/50])が繰り返される。そしてついにマラテスタの運も尽き果ててしまう。

And he with his luck gone out of him
 64 lances in his company, and his pay 8,000
 a year,
 64 and no more, and he not to try to get any
 more
 [11/51]

マラテスタはこうして、結局 Tempio を完成させることができずに滅んでゆく。だが前述したように、マラテスタの人生がたとえ失敗に、敗北に終わろうとも、時代に抗して闘った一つの成果として、パウンドは評価したいのである。そうした思いが、最後の含蓄ある象徴的一行に結実する。

In the gloom, the gold gathers the light
 against it.
 [11/51]

この行は、直前に述べられた、戦いを終えて引き上げてきたマラテスタをリミニの人々が松明と歓声で出迎える場面を、象徴的に表した「光り輝く細部」である。だがそれに加えて、言わば暗闇(gloom)としての混乱の時代に抗して(against)戦い、闇に呑み込まれそうになりながらも逃げのび持ちこたえて、光を保っている gold としてのマラテスタというイメージを読み込むことができるだろう。この闇に対する黄金のイメージは、他の箇所でも違う文脈で繰り返されていて、例えば第17篇では暁の闇に浮かぶヴェニス宮殿のイメージ([17/78])、第21篇ではプラシディアの霊廟の青黒い丸屋根の金のモザイクのイメージ([21/98])として呈示されている。表現は違うが、第1篇で既に、冥界の闇と、輝ける黄金の装束がモザイク状に浮かび

上がるヴィーナス誕生のイメージとを対置していたことが思い出される。言わばこのフレーズに集約された闇と光の対比は、「詩章」全体の、さらにはパウンドにとっての原型的イメージといっても差し支えないだろう。そして、この「光り輝く細部」に美学的効果を超えた意味を見出すとすればやはり、文明の闇とそれに対して光を置く個人の対比ということになる。マラテスタがそうであり、「詩章」を擁して闇としての現代社会に光を置こうとしたパウンド自身が、そうであった。これは芸術的意図であるとともに、マラテスタ詩章から始まる歴史詩章には、無知の闇に光を添えようという頑なな啓蒙的意図が窺えるのも事実である。パウンドはマラテスタを、彼が信じる通りの姿で闇から蘇らせ、人に知らしめようとした。彼は、マラテスタの時代に対する抗争を賛美し、悪党として闇に葬り去られる運命から彼を救いだして光を当てたのである。それはパウンドがマラテスタの性質、境遇に、自分自身との共通性、親近性を感じとったからと言えるだろう。だが皮肉にも、実人生において、パウンドはマラテスタと同じような悲劇的敗北への道を辿ることになるのである。

注

- 本文及び以下の注で『詩章』からの引用を表す場合、例えば [5/18] として、第5篇18ページを表すものとする。ページは *The Cantos of Ezra Pound*, 4th Collected ed. (Faber & Faber, 1987) による。
- (1) T. S. Eliot, *Selected Essays* (Faber & Faber, 1951), p. 14.
 - (2) Ezra Pound, *The Spirit of Romance* (New Directions, 1968), p. 6.
 - (3) Hugh Kenner, *The Poetry of Ezra Pound* (Faber & Faber, 1951), p. 103.
 - (4) Ezra Pound, *ABC of Reading* (Faber & Faber, 1979), pp. 17-20.
 - (5) Ezra Pound, *Selected Prose: 1909-1965*, ed. W. Cookson (New Directions, 1973), pp. 22-23.
 - (6) Ronald Bush, *The Genesis of Ezra Pound's Cantos* (Princeton University Press, 1976), p. 14.
 - (7) Ezra Pound, *Guide to Kulchur* (New Directions, 1970), p. 60.
 - (8) T. S. Eliot, *The Complete Poems and Plays*

(Faber & Faber, 1969), p. 75.

(9) Ezra Pound, *Collected Shorter Poems*, 2nd ed. (Faber & Faber, 1987), p. 154.

(10) [9/36]

(11) Pound, *Kulchur*, p. 194.

(12) [13/59]

(13) Ezra Pound, *Confucius: The Great Digest, The Unwobbling Pivot, The Analects* (New Directions, 1969), p. 103.

(14) Pound, *Kulchur*, p. 159.

(15) *Ibid.*, p. 2.

(16) *Ibid.*, p. 159.

(17) “and built a temple so full of pagan works” [9/41]